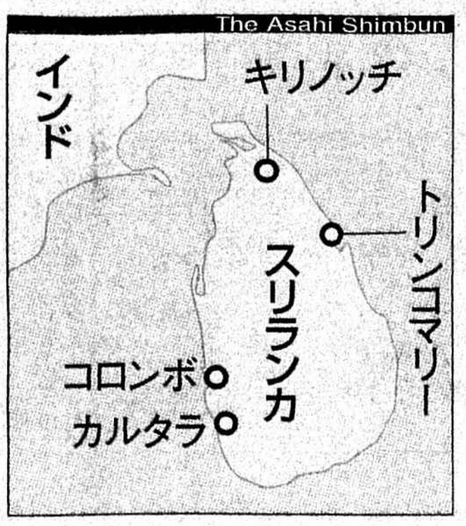
61年目の夏

紛争地から考える ㊤

誤解から憎しみ拡大



インド半島の先端に浮かぶ島国、スリランカ。紅茶で有名だが、多数派のシンハラ人と独立を目指す少数派のタミル人との間で20年以上、内戦が続く。02年2月に政府とタミル人反政府ゲリラ「タミル・イーラム解放の虎」（LTTE）が停戦合意したが、その後もテロや爆撃が頻発している。

「国内が完全に二つに分かれ、国の中にさらに国境があるようだった」

中能登町出身で、7月下旬にスリランカから帰国したばかりの看護師島田尚美さん(33)は、スリランカの現状をこう表現する。

島田さんは東京で看護師として働いた後、タイの大学院で公衆衛生を学んだ。「勉強したことを生かせる」と、途上国や被災地で医療活動を展開するNGO「AMDA」（本部・岡山市）での活動を希望し、05年春、スリランカへ渡った。

◇

スリランカ最大の都市、コロンボから南に約30キロ。カルタラというシンハラ人が多く住む町で島田さんは、医療支援員として、手洗いや歯磨き、栄養などについて、住民に教えた。

スリランカには、仏教徒のシンハラ人、ヒンドゥー教徒のタミル人、イスラム系のムーア人が住んでいる。AMDAはLTTEの本拠地である北部のキリノッチ、3民族が住む東部のトリンコマリーにも拠点を置いた。

政府とLTTEの支配地域の間には、それぞれの検問があり、外国人でも車のボンネットを開けられ、エンジンまで調べられた。だが、それぞれの町では、自転車で転んだのを助けられ、家でもてなしも受けた。

シンハラ人にとって、コロンボなどでテロを起こすLTTEは怖くて、憎い存在だ。支配地域に行くことはない。

カルタラの人は、キリノッチに出かける島田さんに「なんでそんなところに行ったの」と尋ねた。その一方で、「怖くないの」「検問はどうなっているの」と興味を示す人もいた。

「私がキリノッチに行くことで、キリノッチが近い存在になる。一歩進んで考える機会になればと思った」

民族の交流を進めたいと、島田さんらは、拠点間で子ども同士の絵やカードを毎月交換もした。

◇

だが、島田さんの滞在中、情勢が良くなることはなかった。帰国前の6月には、コロンボ市内のいつも通る道で自爆テロに遭遇した。煙がたち、軍隊が騒ぎ、パニック状態だった。バスを狙った無差別テロも起きた。

シンハラ人は、LTTEのトップを「殺す」と言い、キリノッチは戦争一色。「お互いに憎しみが増し、どちらも我慢できない状態だった」。7月からは政府軍とLTTEの戦闘で、多くの人が死亡している。

島田さんは「たまたま平和な日本に生まれたから、戦争はいけないと分かる。私もスリランカに生まれていたらLTTEになったかもしれない。そこに生まれた人に悪気がある訳ではなく、小さな誤解、憎しみからこうなったと思う」と話す。

だが、希望を捨てた訳ではない。「100人に1人でも活動に共感してくれたら。1人でも2人でも変わってくれれば、それが和解につながる。シンハラ、タミルでなく、『スリランカ人』と言える子どもが増えてほしい」。また近く、スリランカに渡り、活動したいと考えている。

☆

テロ、内戦。世界では争いは絶えない。今回は紛争地から、戦争と平和について考えた。

スリランカでの経験を話す島田尚美さん。着ている服もスリランカで買ったものだ＝中能登町で

1人でも変わってくれたら